

瑜伽唯識思想大系

保坂玉泉

一 唯識諸經論の系統

唯識思想の源流は「解深密經」と「阿毘達磨經」との二大系統に分けられる。前者は「瑜伽師地論」に流入して一主流を形成し、「阿毘達磨集論」「同雜集論」「顯揚聖教論」「三無性論」を發生して「成唯識論」に至り、後者は「大莊嚴論」「撰大乘論」「同釋論」と一系をなし又「成唯識論」に至つた。更に此二大系統に前行したものは「十地經」であるから「十地經」は瑜伽唯識全体系の太原ともいふべきである。

其他「般若」「維摩」「勝鬘」「楞伽」「厚嚴」即「密嚴」「如來出現功德莊嚴經」「佛地經」等中に唯識所依六經に屬するものもあるが、是等諸經は親疎の差なく傍系として側面から前記主流に影響を與えている。

此二大源流の太原に位する「十地經」は瑜伽唯識思想教學の末流を流出し唯識を大成した根源となつたのだが、就中その大きな思想的根源をなしたものは菩薩道と唯心觀との二大思想である。大乘佛教は言うまでもなく菩薩教である。「深密」

も「阿毘達磨經」も共に菩薩道を組織するには「十地經」を採用するより外に道はなかつた。

此點は他の「華嚴」でも「密嚴」でも乃至「楞伽」「佛地經」でも皆「十地經」を採用せずには大乘經たり得なかつたことは同様である。故に「十地經」なくしては一切の大乘經は發生し得なかつたので、「十地經」は正に諸大乘經引いては諸論の母胎であつたと云うても過言でない。

次に瑜伽唯識教學に於ける中心思想たる唯心唯識觀の起原も亦「十地經」に在り、常に云われる如く、「十地經」第六現前地に於ける「三界唯一心」の文は佛教に於ける心の最初獨立の文献であつて「瑜伽」「唯識」の唯心思想唯識教學の根源となつた。先ず「解深密經」心意識相品の心意識説、分別瑜伽品の「識所緣唯識所現」の唯識觀は共に「十地經」の三界唯一心觀に基いたものと見ねばならぬ。(阿含や部派の唯心思想の影響を側面から受けたことは勿論であるが)。次に「阿毘達磨經」は其全貌を窺うことが出来ないが、其殘

存片鱗だけでも又「撰論」を介してでも六度十地十地の菩薩道を完備していたことも知られるし、之れは勿論「十地經」から得來たものであるし、心意識説に至つては其頼耶思想種子薰習思想の如きは「深密」以上に進んでいるが、是亦「十地」の唯心思想を承け更に其他の頼耶思想を参考して擴充したものである。

「瑜伽師地論」は三乗教學を大成した、これ素より其菩薩道を以て二乗を統一したものである。而して此論は二乗の所學を「阿含」「阿毘達磨諸論」「般若經」等に採り、菩薩道をば云うまでもなく「十地」「深密」に仰いで茲に菩薩道の所有問題を組織的に論究して其菩薩道を大成した。故に爾後「瑜伽」の支論は皆其菩薩道を繼承し一面大乘佛敎昂揚の根據とした。為に支論は「瑜伽論」所説の二乗所學をもはや用いず専ら菩薩道のみを究明することに努めたものである。

次に心意識論に就て「瑜伽」は其初頭本地分五識身相應地意地に於て八識五十一心所等の心意識を組織した。これは元より「解深密經」の心意識相品を直承したもので、更に撰決撰分に至つて發展擴充して是亦心意識論を組織教學的に大成した。爾後の心意識説も此「瑜伽」に於て完全に究め盡されたから新に手を染める必要がなかつた、更に研究する余地がなかつたものである。

「阿毘達磨經」「大莊嚴論」「撰大乘論」の系統に就て、

先ず「大莊嚴論」は菩薩道の昂揚を目的としたから、菩薩道が論の形態の主要部を占め、其部分が「瑜伽」の菩薩地の各品の繼承であるが、其内容を擴充し又教證するに其他の諸大乘經を採用している。

其他の大乘經というは恐らく「大乘阿毘達磨經」等を始め諸大乘經を意味するものである。この事は「大莊嚴論」の多くの頌が「撰大乘論」に引かれているが此部分に亦「阿毘達磨經」の斷片が多く引かれているところを見ると思多半に過ぐるものがある。「撰大乘論」の菩薩道は素より「阿毘達磨經」の三學、六度、十地の義を繼承したところであるが、更に前弁の如く「大莊嚴論」の菩薩道を受けた「莊嚴」の菩薩道は「瑜伽」を受けたのであるから、結局「撰論」は「阿毘達磨」と「瑜伽」と「莊嚴」との菩薩道を合わせたものである。

「阿毘達磨經」の系統に於ける心意識論に就ても、本經の全貌が不明のため「攝論」等を介して逆推するより外ないが「攝論」所引の阿頼耶の伽陀に就て見ると、前述の如く心意識は「深密」以上に遙かに進んだものである、恐らく之は、「深密」から承けて更に發達したものと思惟される。

「大莊嚴論」は元より菩薩道（六度十地）を昂揚するのが目的であるから心意識論というものは殆んど見るべきものがない、これは必要がなかつたからであろう。

然るに「攝論」にありては其目的が大乗綱要佛教概論を究明するものであるから「阿毘達磨經」の十種殊勝相の綱要を形態としつゝも「深密」「阿毘達磨」の二系をも合わせ所有問題を組織した。即ち先ず所知依分第一に於ては「深密」「阿毘達磨」の心意識説を教證として之を出し、更に「阿含」や部派の種子思想をも捉えて恰かも心意識論思想發達史を展開し、心意識論研究の教義と歴史とを併せ組織したのである。此意味に於て「攝論」というものは従來の唯識諸經論の統一論とも見られるのである。

尚瑜伽唯識の重要な問題に三性三無性論がある。三性三無性論は諸法縁起價值觀で菩薩道の觀心觀行の方軌である。これは早く「解深密經」の一切法相品と無自性相品とに委しく説き出だし、次の分別瑜伽品（唯識觀を説く）への準備をなしている。三性觀は「阿毘達磨諸論」の有思想の組織説であり、三無性觀は「般若」の空思想である。「深密」は此二大思想を統一して三性三無性説を組織した。恐らく本經が此説の起原であろう。「阿毘達磨經」の残存斷片の多くは唯識觀行の方法たる三性三無性説である。この説も「解深密經」の先驅を予想しなければならぬであろう。而して「深密」系統の諸論は「瑜伽論」を始め、専ら「深密」の三性三無性説を繼承し阿毘達磨系統の諸論は「阿毘達磨經」の三性三無性論と深密系統のそれとも合わせ持ったようである。

最後に瑜伽唯識の系統中に特に一系をなすものに因明系統がある。これは最後「解深密經」如來成事品に因明が採用せられ佛説法の一形式として佛は因明を用いて正理を説くとし「因明教源唯佛説」の義さえ成すに至つたほどだから「瑜伽」に於ても七因明を論じ、「阿毘達磨論」にも「顯揚論」にも皆七因明の論軌が記されている。「阿毘達磨經」にも十二正觀の説があつたようであるからやはり因明が説かれていたと思われる。何となれば「阿毘達磨集論」には七因明論軌に次で十二正觀を出しているからである。

以上菩薩道（十地）、心意識論、三性三無性論等の唯識教學の重要問題の系統を明かにし得たのであるが、其他多くの小問題については今略して述べない。

斯くして二大系統による瑜伽唯識思想教學を全部繼承統一したものが「唯識三十頌」及び「成唯識論」である。この「成唯識論」の製作に依つて印度瑜伽唯識は一應總結完成した。

二 唯識教義の系統

「唯識三十頌」第一頌「由假說我法有種種相轉彼依識所變」の三句を「成唯識論」卷一初に釋して

變謂識體轉似二分相・見俱依自證一起故とあるを「同述記」一本五十七丁右（舊板本）に更に之を解している中に

許レ有ニ相見ニ一体性一者相見種或同或異という。而して「極要」上末^二右に相見或同或異説を以て護法の正義としたる上「頌曰性境不隨心云云」と三類境の頌文を出だし、性境中不隨心を釋するに

亦不^二隨^レ心一種所生一由^二見相種種各別体一といひ、又帶質境を釋し「通情本」というに就て

亦得^レ言^下從^二本質種一生上亦得^下説言中從^二見分種一生上義不定故

という。「了義灯」一末^二右には相見同種別種生の問題を廣く取扱つて三師の異説を擧げ其長短を批評して、此相見同種別種論、性種繫或同或不同等不定、差別複雑で

由^二此不定一故 三藏法師以為^二一頌一顯^二此差別一云性境不隨心云云

とある。以上の所引によつて明かなる如く、三類境義の依文的發祥は相見同別種の解義に由り遠くは「三十頌」の變の一^一字に皈すといふべきである。

次に四分説の發祥も亦前記

變謂識体轉似^二二分^一相見俱依^二自證一起故の文に依つた。此文の研究からして安惠・難陀・陳那・護法のそれぞれの一・二・三・四分の立分説が興つたといわれる。少くも陳・護二師の三・四分説はそうである。されば四分と三類境の學説は共に「三十頌」第一頌第三句「彼依識所變」の文から起源發

祥したことになる。

此文献史實に據つて今度は四分三類の心理的思想的起源を檢討してみよう。「三十頌」の第一頌は「三十頌」全体の總論であるから、後の二十九頌は結局皆此一頌の演繹である。即ち、實我實法の二大思想を破邪して一切の我法的存在を悉く唯識所變なりとし、從來の印度哲學思想を唯心一元に皈統して三界唯心方法唯識の法幢を高建したものである。

此唯心一元の佛教哲學を如何に組織するか、この問題が無着・世親・安惠・護法等の唯識教學の成立を促した。心外無法三界唯心とは結局萬有の存在價值を人間の認識によつて判斷規定するものである、認識は存在である。「心は諸如來を造る」と共に一面實我實法の思想も識の所變所造である。一切の眞偽善惡美醜の實存は皆心の動きによつて生ずる。心の動き識の所變、換言すれば心の分別なるものを分析的に研究したものが四分説となり、識所變の存在を價值判斷したものが三類境義であつた。且つ四分説の相見同別種問題から当然三類境論が起つたのであるから、四分三類兩説は不可分のなものである。

因にいう。既に三類境は相見二分の同種別種論に基いて起つたものであるから、唯識學の一方の代表者安惠は唯一分家にして最初から相見二分の存在を認めないのであるから従つて三類境説の起りようはなかつた。然るに四分を建て相見二

分の存在を認める護法派には當然三類境義が發祥しなければならなかつた。

抑も四分説と三類境論との學説としての起源は、前者は早く陳那・親光を経て護法に至つて完成し、後者は支那に至つて始めて玄奘の創唱するところであつた。蓋し護法の四分説は印度唯識派の終末に現われた學説であつて、四分説を以て方法唯識の理を解するに満足して未だ三類境義の必要を認めなかつた。これには恐らく、他に早く三性三無性説や三量説があつて存在價値の論定に充分であつたからであらう。

然るに護法四分説の直系正傳たる玄奘に至つては専ら四分説を盡究的に探求し、護法の性用別論主義即ち現象學重點の學風に促がされ物の存在價値を至微精細に研究した結果、三類境義の發見創唱となつた。三類境義は實は支那唯識の原頭をかざり又特色となつたものである。

且つ支那にありては玄奘作の五言四句一頌が窺基・惠沼・智周の三祖に依つて研究恢弘せられ、三類境義の學説組織が確立せられ、頗る發展し一應完成したのである。

我國唯識法相宗に古來四傳あり、第一傳道昭は玄奘より直傳し行基・護命を其流に出だし、第二傳智通・智達は玄奘・窺基に直承し、此二傳が合して南寺元興寺傳を形成した。第三傳は智鸞・智鳳・智雄等にして其門流に義淵を打出し、第四傳は玄昉にしてその門流に善珠を出した。此二流は共に第

三祖智周に面受正傳し合して北寺興福寺傳を形成した。是等四傳中、最初第一傳道昭が支那唯識の元祖玄奘に承け、最後第四傳玄昉が第三祖に承けたといふことは、日本唯識南北兩傳の思想學説に異數の影響を與えたものの如くである。即ち前者は印度直傳早々の唯識を傳えたものであり、後者は支那に於て三代の間支那的に研究され發達したものを傳えたからである。今三類境義の南北兩寺傳の異見に就ても同様なことが認められるのである。

斯くして此四傳二流の代表的學者は「研神章」の著者南寺の護命と、「增明記」の著者北寺秋篠の善珠とである。是等二師二論書は南北兩傳の學説異見の代表的依憑の文献證典である。此二論によれば南北兩寺傳の相違は主として此三類境の問題を回つて論諍せられたようである。蓋し前弁の如く南寺傳は玄奘創唱の學説を直傳して支那未發達の三類境説を繼承せるものなるべく、反之北寺傳は支那三祖三代の間に圓熟せる。唯識、發達せる三類境を傳來したから、夫々兩寺傳承に影響を與え異論對立するようになった。古來法相宗に於て南北兩寺傳の相違の論諍の焦点は重に此三類境の問題にあつて、他の問題に就ては極めて稀れである。

南北兩寺傳の三類境義の主な異點は「温知録」の曰う如く、南寺道昭傳は「觀心修入為本」、北寺玄昉傳は「法相建立為本」の相違にありと、前者は唯識觀行實踐の立場、後者は

唯識理論研究の立場を取るものであつて、その根本的相違から種々なる異見が生じた。之を要するに支那で創唱發祥した三類境義は、日本に來て頗る發展した。日本唯識の特色は三類境義に在つたというも過言ではあるまい。この發達した三類境の研究こそ余が學位論文の内容である。

唯識學は廣汎であつて、分量的には三能變論で諸説を統一せられるが、實質的には四分説三類境義で諸法相を網羅貫攝してると言える。即ち唯識とは心外無法三界唯心を説くもので、その理由を建てるものが四分説三類境義であるからである。故に古來四分三類唯識半學とさえ云われたほどである。且つ唯識學は素より繁瑣な學問で同時に難解な學問である。殊に三類境論に至つては難中至難のものである。爲に古來三類境に關する編著は甚だ稀れで、參考するものも至つて少ない。その代りに三類境義に通曉すれば唯識の難解の諸問題は直に氷解するほどである。が然し研究者も至つて少ないわけである。

抑もかゝる經過を以て發展し來た三類境なるものは結局實證的認識論、精神分析學或は實驗心理學の部類に屬するものになつたのである。而して是等の論中甚だ難解なのは、佛教では三界六道の生類の生命現象、精神現象及び心理現象を研究の對象とするために、人間以外の極めて特殊なる生命心理現象、例えば天人の心理、禪定意識、従つて天人の天眼識、

天耳識等の神通力、禪定の所産として定果色、業力所感の業通或は業果色、又は夢中意識から幻覺、錯覺、直覺の境、佛菩薩の悟りの心理等、尋常未經験、超經驗の世界をも科學的論理的に價值判斷をしようといふのであるから容易なものはない。

餘が學位論文「唯識三類境の研究」に於ては右難解の諸問題を一應纏めたつもりである。而して各論書を涉獵して古徳の研究を組織論述し、各境毎にその實例を幾多擧げて實證し、且つ難解なるものは視覺に訴うべく數種の圖解を附したのである。

纏つた三類境の研究は我が恩師故佐伯定胤大僧正の「三類境義本質私記」より他に類を見ない、余の論文は本書刊行以前の御草本「本質私記」に負うところ甚だ多い、法乳の慈恩に酬ゆるところあれば誠に幸である。